

もよく用いられた。江戸幕府の老中などが將軍の命を奉じて出す文書〔奉書〕に用いられてからこの名が起った。大奉書とは大判の奉書紙。

注(6) 豎紙〔たてがみ〕とは、全紙そのまま使用したもの、豎文とも称した。

継紙〔つぎがみ〕とは、つぎ合わせた紙。

注(7) 「殿」は儀礼的な敬語で、差出人と受取人との関係、或いは身分関係などによって書体を変えた。また差出書き乃至宛書きを書く位置に高低上下の差があった。「殿」の種類としては〔書体はここでは省略〕

1でんどの〔最高位〕・2宰相どの・3中将どの・4ふたつがけ〔少将及び侍従などに〕・5ひとつがけ〔四品及び諸大夫に〕・6ぐるどの〔万石以下〕・7ばんでん・8仮名どの・9〔呼び捨て〕があった。また、「様」の敬語は室町時代に入って現われてきたもので、江戸時代には日常語として使用されて、遂に「殿」以上にその人に対する尊敬もしくは親しみの念をあらわすようにさえなった。この「様」にも種類があった。〔書体は省略〕

1永〔えい〕さま・2美〔み〕さま・3おっつけさま・4爾〔に、じ〕さま・5仮名さま・6〔呼び捨て〕である。

資料 伊達家史叢談卷之13 (伊達邦宗)

72 石川左京とは誰か

問 昭和6年に、河北新報社が創刊35周年記念に仙台市民歌を公募した時、二等賞を受けた石川左京⁽¹⁾という人は、どのような人物ですか。

答 それは、石川善助が仙台市南町79、石川左京の名で応募したものです。「詩人石川善助資料」(木村健司編)の内「石川善助年譜稿」に『昭和6年(30才)1931……5月、仙台市民の歌に応募し第2等となり百円を得。賞金の一部で、東北めぐりに出掛け、北海道にも足をのぼした。』と記されています。

石川善助は、明治34年5月21日、仙台市国分町5丁目、父善治・母喜恵の長男として生まれています。代々「菅喜」〔かんき〕と呼ばれる市内中心街の小間物の古舗でした。明治41年立町小学校に入学、この頃から家運が衰え始め、南町79番に転居しました。大正3年市立商業学校〔現仙台商業高校〕に入ると詩作に熱中し出しました。卒業後藤崎呉服店〔現藤崎デパート〕に勤務、大正12年には友人と同人雑誌「感触」を発行、翌13年「日本詩人」に初めて詩が掲載されました。この頃「北日本詩人」「L・S・M」などを詩友と共に創刊、大正15年3月には藤崎を

退職して、「詩神」「未耕地」「北方詩人」などに盛んに詩を発表するようになりました。その間に詩誌「竜」を創刊しています。昭和2年明治製菓仙台売店に勤めていますが、ここを半年で退社し、翌3年かねて念願の上京をしました。そして貧窮の中に創作意欲を燃やしつつ、「改造」等に作品を発表しながら、各所を転々する生活を続けます。市民歌応募は、この間のことでした。やがて、収入の道の全くないまま、昭和7年1月から、市外淀橋角筈の草野心平宅の二階に住み、その家族の一員のように過すことになりましたが、6月27日未明、大森の酒亭「白蛾」で詩友竹村俊郎と飲み明かしての帰途、鉄路から墜落して31年の生涯を閉じたのでした。7月13日、石川家の菩提寺である荒町の皎林寺に遺骨が葬られました。

石川善助は、生前に1冊の詩集を出すこともなく不慮の死を遂げてしまったが、その歿後、昭和8年「鴉射亭隨筆」、昭和12年「石川善助童謡集」が、天江富弥ら仙台の詩友によって刊行され、また昭和11年「阿寒帯」が逸見猶吉・草野心平・穴戸儀一及び島根県の安部宙之介・久幸勝信の手で、高村光太郎・福士幸次郎の序を付けて島根県の大社町で刊行されました。死後27年目の昭和33年9月27日に、彼の詩碑が仙台と東京の知人の友情によって、向山愛宕神社境内に建てられました。自然石にはめ込まれた横90cm、縦50cmの稲井石に、19才の作「化石を拾ふ」の詩が、次のように刻んであります。

『光の澱む切り通しのなかに

童子が化石を捜してゐた

黄緒の地層のあちらこちらに

白いうづくまる貝を掘り

遠い古代の景色を夢み

母の母なる匂ひを嗅いでゐた

……もう日は翳るよ

空に鴉が散らばるよ

だのになほも探してゐる 探してゐる

外界（さきのよ）のころを

生の始めを

母を 母を』

石川善助の作品については、最近更に新しい評価が加えられつつあります。なお、彼の伝記資料には「詩人石川善助小伝」（木村良子、「東北文学論集」第1巻の内）・「詩に架ける橋」（斎藤庸一）などがあります。

注(1) 選者は、土井晚翠と小倉博の両氏で、その歌詞は次の通りである。

1. 赫曜（かがや）く歴史に思いは昂（たか）まり
明るく脈うつ 市民の生活（なりわい）

和親に溢るる 日夜の平安(やすらぎ)

正しき伝統(つたい)を 我らは喜こぶ

藩祖を讃へよ おおわが仙台

2 絵巻を展げる 緑の都よ

木の間には波うつ 家並の起伏

自然の恵みに いそしむ心に

気高き理想の 文化は芽生へん

聖なる学都よ おおわが仙台

3 明るき市政に 明るき人々

時代の律動(リズム)に 血潮を合せて

先駆の誇りに 栄えよ商工

若やぎ華やげ 賑はへ町々

希望は東へ おおわが仙台

この時の賞金は、1等300円、2等100円、3等50円だった。なお1等の作詞は堀内敬三の作曲をつけて、昭和6年10月9日河北新報社から仙台市に贈呈され、終戦時まで広く市民の間で歌われたことについては前述してある。

資料 石川善助童謡集

詩人石川善助資料(木村健司編)

73 相沢三郎・村中孝次の墓はどこにあるか

問 相沢事件の相沢中佐と、二・二六事件の村中孝次の墓が仙台にあるとのことですが、それぞれどこにあるのですか。

答 相沢三郎の墓は仙台市新坂通充国寺に、村中孝次の墓は仙台市土樋松源寺にあります。

注(1) 昭和10年8月12日、陸軍歩兵中佐相沢三郎が陸軍省軍務局長永田鉄山少将を、同局長室で殺害した事件。この頃天皇機関説問題が起り、陸軍部内でも皇道・統制両派の対立がけわしくなってきた。相沢は皇道派の西田税・村中孝次らの影響下に、統制派の永田鉄山を目して重臣・政党・財閥・官僚と結んで皇軍を私兵化する中心人物であると、殺害を決定したものである。その軍事裁判が翌年1月開廷されたが、程なく二・二六事件が突発し